

随泉寺寺報

平成27年(2015年) 9月号 第541号

TEL.082-892-0217 <http://www.zuisenji.com>

浄土真宗本願寺派 高峯山随泉寺

秋季彼岸会法座

講師 教正寺住職 武田 義香師

講題 『願い』

■ 「学校が始まるのが死ぬほどつらい子は図書館へいらっしやい」

「図書館はあなたの居場所になりたい」。2学期が始まるのを控え、鎌倉市図書館の公式ツイッター上でのこんなつぶやきが大きな反響を呼んでいます。

「つらいきもちをかかえているあなたへ 図書館はあなたの居場所になりたいと思っています。心のすみっこに『としょかん』をおいてね」と。

《つらい気持ちや生きるのが苦しいとき、お寺にいらっしやい》 お寺の本堂はいつでも開いています。自分自身を見つめなおしたいとき、悲しくて悲しくてやりきれないとき、誰にもわかってもらえなくて苦しいとき、お寺の本堂に座ってみてください。そこはあなたのすべてを抱きしめ、つつんでくださる場所です。

本堂はあなたのこころの居場所です。心のすみっこにおいてください

9月の法座予定

- 9月 2日……………本部役員会
- 9月 13日……………掃除 荒野
- 9月 15日朝席午前10時より……………主婦の集い おとき
- 9月 15日昼席午後1時より……………秋季彼岸会法座
- 10月 2日午後5時より……………門信徒会本部役員会

9月 カレンダー法語

東井 義雄師

「力をぬいたとたん 世界がひらける」

私が、若い頃読みふけた懐しい書物の中の一冊に、出隆先生の『哲学以前』があります。出隆先生は、哲学者であられるとともに、「神伝流」の水泳の達人でもあられたと聞いています。

その出隆先生が、何かに「水泳」のことをお書きになっていました。「水は、人間を浮かせるだけの浮力をもっている。しかるに、人間が溺れるというのは、心の重みで溺れるのである。だから、溺れた人というのは、『こんな所で：：』と思われるほど、浅い所で溺れている。結局、水の浮力に足をとられてあわててしまい、その心の重みで溺れたのである。心を無にして、身も心も水に預ければ、自分の力を使わなくてもおのずから浮かぶ」というような内容の文章でした。

出隆先生の、「心を無にして、身も心も水の浮力に預ければ、おのずから浮かぶ」というお言葉は、親鸞聖人が「如来の本願力に乗托すれば、おのずから然らしむる自然法爾の世界を恵まれる」とお教えくださっていることにも通じているように思います。



またそれは、私か子どもの日、あの熱くて熱くてたまらなかったお灸の熱さが、「きばり心」を抜いたとたん、あんな快い安らぎの世界に変わったことにも、つながっている気がするのです。



私は、初め、お灸の熱さに負けまいとする「きばり心」の重みで、熱さの底に沈み、熱さの苦しみに溺れていたのです。それが「きばり心」を捨てたとたん、熱さが苦にならない世界に浮かせてもらったのです。

どなたのお作か存じませんが、「散るときが浮かぶときなり蓮の花」という句が思い出されます。「自分が……」という「我」が散ったとき、ポッカリ、安らぎの世界に浮かばせてもらうのです。水に「浮力」があるように、私に注がれている「本願力」が、沈むしかない私を、浮かせてくださるのです。

◆第19回研修旅行

今回は安登 浄念寺・川尻 真光寺・阿賀 西光寺の3ヶ寺を訪ねます。安登の浄念寺は来年御出講を頂く安達高明先生のお寺です。住職の高校時代からの同級生で親しくしてもらっています。

川尻の真光寺のご住職寺西龍象先生も何回か御出講いただいている方です。阿賀の西光寺は叔母のお寺です。10年前に従兄弟が50歳の若さで、お浄土に帰りました。今年ようやく長男藤瀬和亮が住職となりました。

☆浄土真宗本願寺派前門主 大谷光真著「あけぼのすぎ」

俗名 小澤正之 法名 釋誠言 平成27年2月3日往生 行年98才
孫の敬子さんの偲ぶ言葉を頂きました。すばらしい文章で感激しました。

—浄土真宗一口法話— 9月

「人生とはその日その日の法縁である」

(金子大榮)

近年、私が思いめぐらしていますことの一つは、浄土真宗、親鸞聖人のみ教えと私たちの日常生活との関係です。二つを切り離してしまっ、あの世のことは阿弥陀さま、この世のことは神様では困ります。

先ず、思いますことは、日々の出来事を縁として、阿弥陀如来さまの智慧とお慈悲を味わうことです。嬉しい事があれば、恵みに感謝し、独りよがりの幸せになっていないかかえりみる、辛いことがあれば、阿弥陀如来さまに支えられ、現実を受け容れ、率直に思いを表すことなどが思い起こされます。

さらに、そこから、一步進めて、周りの人々、次の世代へと働きかける、世の中をより良くしていくことがこれからの課題です。御恩報謝は、阿弥陀如来さまに直接お返しをするだけではなく、世の中に、次の世代にお返しをすることが、阿弥陀如来さまへのご報謝になるのではないのでしょうか。

一日一日をお念仏の大切なご縁として、過ごしましょう。

☆ここ十数年の間に、私たちの生活はどんどん変化してきました。

特に携帯電話やパソコンの普及によって、自分で文字を書くという機会が減っています。そのせいでしょうか、いざ自分で何か漢字を書く必要があった時に、その漢字が出てこないことがあります。

そんな現代で、人気があるものにインターネットがあります。これは電子機器を使って利用するのですが、ボタン一つで商売や調べ物ができたりと大変便利なものです。さらに、それだけではなく新しい社会としても機能しており、たとえば遠くに住んでいて顔も名前も知らない人と知り合ったり、仲良くなったりすることも可能です。かたや顔や名前は知っていても交流が薄い、かたや顔や名前は知らなくても交流が深い、面白いですがどこか変ですね。こんなねじれが様々な事件や事故を起こしている原因の一つかもしれません。⇒



⇒ 中国の昔の書である「莊子」に出てくる「機械あれば、必ず機事あり、機事あれば、必ず機心あり」という言葉があります。「機事」というのは機械によって一つの仕事ができる、機械を使う仕事ができる、ことであり、「機心」というのは、機械を使って仕事をしていると、いつの間にか心まで機械のようになってしまう、ということだそうです。

機械や道具を使って仕事をしているうちに、いつの間にか今度は心まで道具に使われてしまっている、そんなことを感じることはないのでしょうか。

この頃私も、携帯電話でスケジュールを管理しています。まるで携帯にこき使われている感があります。自分の足下をしっかりと見据えていかないと大きな落とし穴があいているかもしれません。

☆ 御礼

永代経懇志	金	拾万円	七竹にしき殿	故七竹則男様	特別永代経志として
永代経懇志	金	五万円	西川 邦子殿	故西川 元様	特別永代経志として
永代経懇志	金	拾万円	古堀 恭子殿	故古堀岩男様	特別永代経志として
永代経懇志	金	貳百万円	観心院釋正護	中本健一殿	遺言にて

☆ 御礼

門信徒会へ	金	一封	西川 邦子殿	故西川 元様	香典返しとして
門信徒会へ	金	一封	下垣チエコ殿	故下垣良一様	香典返しとして

いまから 2500 年以上前にお釈迦様によってお説きいただいた仏教は、インド、中国、そして、朝鮮半島を経て、幾多のご苦勞の中、私どもの日本に伝来しました。お念仏の教えを日々の生活で悩み苦しむ私たち、苦しみを苦しみとも感じずにいる無明の中の私どもに、わかりやすくお説きくださったのが、親鸞さまです。そのみ教えは、「阿弥陀さまの本願を信じ、念仏申せば仏となる」というお念仏のみ教えです。そのお念仏のみ教えは、私たち一人一人のかけがえのない人生を活かし、受け止め、生きる大いなる道です。忙しい毎日に追われ、目先のことにとらわれて、人生において大切な意味を見失っています。その苦惱の中、何ものにも妨げられることのない、力強い生き方、明るく確かな真に安心して歩んでいける道へと導いてくださる教えなのです。